

白紙余談

日本初の女子大学工学部が示唆する「女性活躍社会」の新たな地平

◇国立大学法人奈良女子大学が来年4月に開設する、日本の女子大学初の「工学部（工学科）」が話題になっている。

◇奈良女子大の公式サイト・フロントページには、工学部での《学び》について、受験生向けに次のように説明されている。「工学は、社会が必要とされるモノやサービス、快適な環境を構築する学問です。個人の主体性を活かした分野融合の学びから、社会が必要としている創造的エンジニアを育成します」。

◇奈良女子大にはもともと、理系の学部として《理学部》（数物科学科、化学生物環境学科）があり、比較的理系寄りの学部としては《生活環境学部》（食物栄養学科、心身健康学科、情報衣環境学科、住環境学科、生活文化学科）があった。

◇例えば昨年度の募集人員は、理学部と生活環境学部を合わせ325名だった。来年度はこの両学部の募集人員を計280名に減らし、代わりに工学部の募集人員45名が、新たに加わる形になるようだ（これで理科学部の募集人員は昨年度と同一の計325名）。

◇9月27日付け毎日新聞ウェブ版の、奈良女子大工学部の話題を紹介した記事によれば、従来の大学の工学部に占める女子学生の割合は約15%。そこに100%女子の工学部が誕生するという訳だが、カリキュラムは「環境デザイン分野」と「人間情報分野」に大別されること。また、環境デザイン分野では「身の回りの環境をより快適なものに改善するデザイン手法」「分子レベルで工業製品の基盤となる材料の研究」など

を学べ、人間情報分野では「プログラミングやデータ解析」「医学と工学を融合させた生体医工学」などが学べると説明されている。

◇さらに「自己プロデュース」や「起業論」などの口座が用意されており、全体的な印象では基礎工学分野よりも応用工学分野、それも研究者を目指すよりも企業活動に融通性の発揮される応用工学分野に重点が置かれているように思われる。従来の工学部に置き換えると生産工学的な分野といえるのかもしれない。

◇生産工学的な分野については、実は女性にかなり適性のある分野ではないかと、かねてより考えていた。◇生産工学的思考法の肝の一つは「ニッチな気付きの実現」にあるといえるだろう。ちょっとしたシステムの改善によって、全体の生産力や生産効率を上げるという生産工学の主要目的は、これから先さらに重視されていくはずだが、これまでは女性の視点があまり入っていなかったきらいがある。

◇それだけに奈良女子大の工学部設立には、小さくない意味があると考ええる。同様のことは電気設備工事分野の企業にもいえるのではないだろうか。女性社員の増加を図る業界企業の思惑としては、今のところ、貴重な労働力としての女性を増やすこと自体に重点が置かれていると思われる。その半面、企業の方向性の幅を根本的に広げるといって《核》の部分を意識した採用には、まだ主軸が置かれていないように思われる。

◇奈良女子大工学部の船出が、そうした障壁に壁を開けることを期待したい。（E）